セカンド・ワールド

horito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セカンド・ワールド

【Ｎコード】
Ｎ４５３２ＢＡ

【作者名】
ｈｏｒｉｔｏ

【あらすじ】
仮想現実が実用化された世界で、大学生の蓮と隣に住む幼馴染の桜が日々ゲームを楽しんでいた。
突如としてゲームの世界にログイン中の取り残されてしまう。
その後待ち受ける試練・・・。
仮想が現実となった後、プレイヤー達はどのように行動するのか・・・。

1

腰の裏に装備した武器の柄を、そっと右手で感触を確かめた。
ひんやりとして手に吸い付くような感触。
いつも通りの”愛刀『小太刀・虚鉄』”が浮ついた心を落ち着つかせる。

うっそうと茂る森の中、暗闇に紛れてオレは・・・

。●○●○●。　。●○●○●。　。●○●○●。

この世界は、西暦２０２０年ゲーム業界が協力して作り上げた《バーチャル・ワールド》ロールプレイゲーム。
ゲーム名『セカンド・ワールド』
最大の売りは、現実と違った色々な世界を擬似体験できる事。
中世のヨーロッパを題材にした《オーディン》
三国志を題材にした《シェンロン》
戦国時代を題材にした《アシュラ》
全てが１つのゲームとなって広大な仮想世界の中でプレイされている。
それぞれ大きな大陸となっており、大型の帆船で行きかうことができる。
しかし、航海中は”嵐”や水生モンスターが容赦なく襲ってくることがあるから、簡単に行き来はできない。

。●○●○●。　。●○●○●。　。●○●○●。

《アシュラ》「合戦エリア」にて、【武田家】と【織田家】の合戦の真っ只中。
合戦が始まって３０分が過ぎようとしていた。

オレは斥候として、相手の戦力を調査しに来ていたところで、思わぬ敵を見つけ出していた。
武田家頭首といえば、誰もが知っている【風林火山の武田信玄】
目測で３０ｍ先にいるのが、【武田信玄】その人だ。

この「合戦エリア」には、ＮＰＣの武将は存在しない。
存在するのは、プレイヤーが操るオリジナルの武人。
実在武将の名前を持っているのは、ＧＭといわれる管理者が操っている。

（ということは・・・えっ？
　武田家の頭首を・・・討つということは・・・えぇっ）
ゴクリと唾を飲み込むと、近未来の状況（妄想）が思い描かれる。

討ち取った瞬間、合戦終了のアナウンスが、討ち取られた武将の名前と討ち取ったプレイヤーの名前をエリア全体に告げる。
アナウンスの内容を聞いても、何が起こったのか瞬時に理解する者はほとんどいないだろう。
二回目のアナウンスで参加者中の各々が理解し、熱狂と絶望の叫びがあがるだろう。
ある者は、プレイヤーの名前を叫び英雄とし、一方では、党首を討った仇として呪詛に似た何かを叫び心に誓うだろう。

「通常エリア」に戻っても、頭首を討ち取った初めてのプレイヤーとして《アシュラ》中に話が伝わる。
しばらくは、周りからチヤホヤされるだろうし、もしかしたら、女性プレイヤーと知り合えることもある・・・かも？？
今のフレンドリストは、ほとんどが男で、少数の女性プレイヤーが登録されている。

もしかすると・・・ファンクラブまで出来てしまうか・・・？

ニヤニヤしてしまう口元を何とか落ち着かせる。

システムで決まっていることは、【武田家】は頭首を討たれた場合、貯蓄してある領内の銀行から、1／3が【織田家】の銀行へ送金される。
さらに、武田家領内の各種ショップでは1ヶ月間、税金（5％）が掛けられ、税金の全てが【織田家】に収められる。

莫大な資金が【織田家】にもたらされることになり、軍事力が飛びぬけたものになるだろう・・・。

【織田家】頭首【歌舞伎者（うつけもの）の織田信長】より考えられない金が、報奨金としてもらえるかもしれない。

新しい武器や、変わった装備に目がないオレは、はっきりいって貯蓄することができない。
同じぐらいの階級（レベル）のプレイヤーは、武家屋敷（マイホーム）を持っている者が多い。
これまで得てきた総額のお金は、大差ないのに、どうしてこうも違うのか？

というのもオレは、『セカンド・ワールド』の正式サービス当初から参加している。
古参のプレイヤーであり、小さいがギルドマスターとしての地位を築くだけの力を持っている。
オレは「忍び頭」として割と有名だ。
忍ぶ者と書いて忍者と読むのに、知れた名前というのも、どうかと思うが、実例を挙げると服部半蔵（はっとりはんぞう）や風魔小太郎（ふうまこたろう）のようなイメージだ。

『セカンド・ワールド』がサービスを開始して以来、頭首が討たれるといった状況は一切なかった。
もともと、GMが操っている武将が討たれる事など、システム的に許可されていても、ありえることではなかったからだ。
さてさて、初めての討伐者となるか、無残に敗れるか。
緊張の瞬間は刻一刻と近づいてくる。

打ちかかる前に、意外と冷静になり、状況を伝えるために今回の総大将プレイヤーにメールを飛ばす。
合戦の指揮をとる大将プレイヤーは、頭首とは違い合戦ごとに決めることができるのだ。

「我、敵国頭首ヲ発見セリ。コレヨリ、討伐ヲ試ミル。」

なぜに、軍隊の電信みたいな文章を送ったのかは、胸中をさっしてほしい。
返答を待つ数秒は、1時間が過ぎるかのよう長く感じられた。

「了解シタ。幸運ヲ祈ル。」

と、同じ文面のメールが届いたのを確認すると、目的の相手を目で

捉え討ちかかろうとした。
その瞬間、
「無事に討ち取れたら、結婚しよ！」
と、突然の逆プロポーズがメールで届けられた。
「・・・え？結婚？！」
オレは、理解できずに、間の抜けた声をもらしてしまった。
瞬間的に緊張した空気が一帯を包み込んだ。
怒気と緊張を含んでいながらしっかりと低めの声で
「だれだ、そこにいるのは！」
時代劇でおなじみのセリフを発した【武田信玄】。
ばれてしまっては隠れている意味がないので、苦笑しながらではあるが堂々と姿を現しと名乗りを上げた。
「【織田家】忍び頭レン
お命頂戴仕る！」
腰の愛刀を抜き放つと、二つ名に恥じない動きで瞬間に吹く風のように相手との距離を詰めた。
オレの愛刀は、刀と脇差の中間ぐらいのサイズで小太刀という。分類的には脇差になる。
武器の種類は、”刀・脇差・素手・槍・弓”として、大まかに分類されている。

刀の中にも、打刀・野太刀・長刀などがある。
武器は、クラスとは違って、熟練度で武器スキルを覚えていくことが出来る。

”虚鉄”を逆手に持って、身体の前に構え切りかかった。
相手との距離をほんの一瞬で詰めると一瞬でしゃがんで相手の側面から切りかかる。
連撃を繰り出しては、下がり、間合いを詰めて連撃といった、ヒット&ウェイを繰り返した。

忍者クラスは、簡単に言えば攻撃力は強く急所攻撃も得意だが、重い防具が装備できず防御力が低いのが欠点。
クラス技は、隙をついて急所攻撃、分身をつかって攻撃をかわす等、イメージ通りだ。
自分の姿が確認されてからの急所攻撃は困難を極める。

戦闘中に改めて姿を隠すのは容易ではない。
まして、相手は、【軍神・武田信玄】なのだ。
生半可な奇襲は、防御力の低い忍者には、命取りとなってしまう。
だからこそ、必殺の間合いで急所攻撃により瞬殺が理想だった。
驚くことに頭首相手でも、必殺の一撃が決まれば、体力を吹き飛ばしてしまうぐらいの威力がある。

刀を交えてから、どのぐらいの時間がたったか、レンは把握できなかった。
それぐらい一合一合集中していた。
値千金の頭首の首を目前にしていながら、強敵と刀を交える興奮と緊張から、不思議とレンの口元は笑っていた。

１（後書き）

間違ってＲ１８にしてしまったものを投稿しなおしました。

修正しながら投稿したいと思います。

よかったら感想をお願いします。

2

「親方様ご無事ですか！」
「みんなっ、間者が一人紛れ込んでるぞ！」
「他にも潜んでるかも、周囲を警戒しろ！！」

1対1の対決で5分もの間、打ち合うというハイレベルな戦いは、近衛武将の到着で幕を引いた。

「うむ、天晴(あっぱ)れであった。惜しかったが、ワシは一人では、討ち取られたりはせぬよ。」

【信玄】の言葉には、若干の強がりが見て取れたが、指摘するような気概は持ち合わせていなかった。

「あぁ～あ、オレのモテモテ計画が・・・。」

心底残念そうにつぶやくと、改めて周囲を見渡した。

「じゃぁ、この辺で帰ります。あっ、見送りはいいからね」

友達の家にから帰るときのように、気軽に帰ろうとしたが、

「またねー、ってなるかい！！」

乗りツッコミをしてきたのは、近衛武将の隊長と思われる朱槍をもった武将だった。

「あははっ、ノリがいいね。【織田家】に来ない？うちは、ボケが

多いから探してたんだよねよツッコミ」
「くっくっく、お主も面白い。こちらに来るなら、よろこんで迎え入れるぞ」

緊張感の欠片もださないレンに、何かを感じたのか【信玄】は、自分に切りかかって来た忍者を勧誘した。
裏には、誘いを断れば見逃さないという意思がはっきりと見て取れる。

「いやぁ～、【武田信玄】の強さは、この身をもって感じたから、次は逃がさないように部下もつれて来る。
楽しみに首を洗ってまってろ。負け惜しみになるが、オレの連れがいれば断言してもいい、おまえの首はつながっていない。今頃、この合戦も終わってる。【織田家】が五国の均衡をやぶって統一に向かって突き進むことになっていただろう。」

普段の砕けた口調から、徐々に真剣みを帯び、殺気を周囲にばら撒きつつ視線は【信玄】から外さなかった。

突如、突風が吹き荒れた。
あたりの落ち葉が風に舞い上げられ、レンの姿が一瞬さえぎられた。

「やつを討ち取れ！逃がすな」
「おう！」

包囲していた近衛武将たちは、瞬時に槍でレンのいた場所を貫いた。
しかし、レンの身体に槍は届かなかった。
攻撃が当たらなかった高威力の技が、思いもしない相乗効果をもたらし、轟音と衝撃が包囲していた武将達を吹っ飛ばした。

「でわ、ごきげんよう」

優雅にお辞儀をすると、その姿勢のまま、消えた。

「はっはっは、最後は、忍者らしかったな。皆ご苦労であった。少々時間をとられたが、予定通り動く」

「はっ」

近衛武将達の顔には、頭首を危険さらしてしまった責任を感じて引き締まった表情をしていた。

。●○●○●。　　。●○●○●。　　。●○●○●。

忍者の高レベル技<葉隠れ>によって、その場を離れたレンは深く息を吸ってゆっくりと吐き出した。

張り詰めた心をゆっくりとほぐしていく。

「あぁ～あ～、オレの幸せ絶頂大金持ち計画が・・・あっ、思い出した！あいつの、あいつのふざけたメールのせいだ！」

・・・コノウラミ、ワスレナイ・・・

背筋を冷たい何かが通り過ぎて、ぞっとした人は、【織田家】筆頭派閥(ギルド)桜吹雪のサクラ。

数少ない女性党首であり、甲冑を着るのが一般的なこの世界で、芸者風の着物を纏い妖艶な雰囲気を持つ。

街中ですれ違えば普通の人でも、変わった趣味の人でも振り返るであろう”美人”だ。

サクラは、”古きよき時代”のおしとやかな女性とはかけ離れた人

物だ。
フランクに誰とでも話し、特別扱いを嫌う。
決断を求められる場合は即決。上司にしたい女性Ｎｏ１．
サクラがあんな冗談を言うのは、レンに対してだけだ。
理由は、『好きだから』ではなく、幼馴染の腐れ縁で幼稚園からずぅ～っと一緒にいるからだ。

「あっ、おかえりレン。【信玄】は討ち取れた？」
「お前、わかってて聞いてるんだよな。」

無邪気に出迎えたサクラを、怒気を含んだ声で答えた。

「アナウンスがなかったろ！し・か・も、お前のメールのせいで、居場所がばれて奇襲できなかったんだからな！ふざけたメール送りやがって」
「残念だね。結婚できなくて」

レンの怒りを素通りして、上目使いでさらに、ふざけてくる。

「【信玄】の前にお前を切る」
「あぁ～れぇ～・・・・。」

サクラは、腰帯をひっぱられ、くるくる回るある意味お約束のギャグをやりながら笑っていた。

2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

3

今回の合戦は、【織田家】の勝利で【武田家】の前線支城を一つ占領することとなった。
勝利の要因は、【武田側】の戦略の要であった【信玄】自身を使った囮作戦の予想外の遅延によって、全体の行動を遅らせてしまった為だ。

【信玄】は「変った忍者にしてやられた。」と【武田家】全体に報告したという。
【武田領内】では、いったい誰のことだか分からなかったが、忍者の育成に力を入れていく事となった。

後に、１０人の忍者が十勇士として、さまざまな合戦で戦火をあげる事となるのは、さらに半年が経った頃の話。

。●○●○●。　　。●○●○●。　　。●○●○●。

合戦が終わって【織田家本拠地】安土城城下町で祝勝会を行い、さらに1時間が過ぎた。
現実の時間と、ゲーム内の時間は同じなので、食事やお風呂などの休憩の為にそれぞれログアウトすることになった。

現時刻は、ＰＭ８：３０。
遅めの夕食を食べると、隣の家の二階の部屋に明かりがついている事を確認した。

「よし、起きてるな。ふふふっ、借りは・・・しっかり返さないとな。」

。●○●○●。　　。●○●○●。　　。●○●○●。

「いつまでやっとるじゃい！」

長々と帯を引っ張っていると、張り手というか裏拳が、レンを吹き飛ばしていた。
なんとか、ふらつく頭を抑えながら身体を起こし、今のが”ノリ突っ込み”のレベルなのか？と思いつつ最後の一言を口にしてしまった。

「殺すきかっ！？覚えてろよ！今から【武田家】に鞍替えして次の合戦で、首チョンしてやるからな！！」
「そう・・・」

いつもの明るい笑顔がなくなり、表情のなくなった顔でつぶやかれた感情のこもってない声。

「えっ・・・何？」
「鞍替えするって言ったよね？私に刃向かうって事よね？だったら今この場で・・・いいよね？」

やばい、やばい、マジで切れてる、というか、斬られる・・・。
あああ、”妖刀・村正”を抜いてますけど・・・ええ、マジなのか・・・？ウソでしょ・・？

声にならない声が頭の中に響いている。
ここは、アレしない・・・よ、よし。

「すいませんでしたっ」

誠意を込めて、額を床にこすりながら男の必殺技”土下座”を繰り出した。

「それで、謝っているつもりかしら？」

普段と口調まで違うサクラに恐怖を感じながら。

「許していただけるなら、な、何でもします」
「ふ～ん・・・。じゃ～さ～、メールの件は無かったことにしてね」
「は？」

指を胸の前で絡ませながら、上目使いで見詰めてくる天使（こあくま）に思わず、唖然としながらも

「はい」
「ありがと、レンなら許してくると思ってた」

ここまでが、計画されたものなのかどうかは・・・いや、計画されたものだろう、相手はサクラなのだから。
深いため息をつきながら、いつもの振り回されて終わるパターンだったと気づいた。

しかし、今日はここで終われなかった。
ゲームで勝てないのは、わかりきったこと。ならば、現実で・・・

。●○●○●。　　。●○●○●。　　。●○●○●。

レンの手には、サクラの大好きな駅前のシュークリーム屋の箱が握られていた。

「こんばんわ、おじゃましまーす。」

「いらっしゃい。桜は部屋にいるから、どうぞ上がってー」

桜ママと慣れた挨拶をすると、目指す部屋へと足を向けた。

コンコンコン。

「桜、いるかぁ、入るぞ〜」

「あ、蓮？どうぞー」

女の子の部屋に入るというのに、緊張の”き”も感じずに入っていく。

「今日はおつかれ」

「蓮もおつかれさま」

軽く挨拶をすると、手に持っていた箱を、部屋の中央に置かれているローテーブルの上においた。

「これ、駅前の”カリム”のシュークリームでしょ？どうしたの？」

普段お土産なんて持ってこない蓮を不思議そうに観ながら、

「あ、もしかしてさっきのお詫びの品か何かぁ？さっきチャラにし

てもらったから、気にしなくていいのに」
「いや、冷蔵庫にあったのを思い出して、日ごろがんばって【織田家】をまとめてるから。たまにはと思ってさ」
「何か怪しいけど、ありがといただくわ」

よし！レンは、心の中でガッツポーズした。なぜなら、シュークリームの中身は、”カラシ”だから。
早く、早く食べろ。
あくまでも、表情には出さずに普段通りに、復習劇は進められていた。

「お茶もってきたわよ、どうぞレンちゃん。」
「ども」
「ありがと」

このタイミングでおばさんが、いつも通りお茶を持ってきてくれた。

「あ、お母さんも食べていけば？」
「あら、駅前のシュークリームじゃない、ありがとレンちゃん」

「あっ、だ・・・め」

レンの静止は届かなかった。
残念なことに、おばさんが口に入れたシュークリームはカラシ入りだ。

この夜、二つの悲鳴が、住宅街の一角に響き渡った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4532ba/

セカンド・ワールド

2012年1月12日18時14分発行